

佐藤春夫先生とコスモス

昔、東京日日新聞が知名人七氏に委嘱して、それぞれ秋草の花を一つずつ挙げてもらい、新七草を選定したことがある。選ばれた新七草は、山上憶良以来日本人に長く親しまれて来た七草とは一風変わったものがあり、その一つ一つを、選んだ人の人柄と結びつけて興深く思ったことがある。そのことがあって間もなく、その中にコスモスが入っていることにいたく感銘された佐藤先生が、その感想を或る文章にお書きになっていた。それを読んだ時の記憶がいつまでも鮮明に残っており、コスモスが咲き出る季節になると、そのことをきまめて思い起こすようになった。

東京日日新聞のこの企てが具現されたのが、さて昭和何年だったか、皆目思い浮かばなかったが、先生その文章は全集本で簡単に探し出すことが出来た。第十一巻の「評論・随筆一」の中に見える「秋花七種」と題する、昭和十年九月付けの一文がそれである。冒頭に、秋の随筆をとの求めに応じて書いたとあるから、この文章が載ったのが、或いは当の東京日日紙上であったか

も知れない。分量から言うと、新聞紙上发表とするのは少々無理なような気もする。そうすると何れかの雑誌か。ともあれ、先生は、東京日日紙のこの企てが伝わり聞こえた時から興味を抱いていたが、それは必ずしも気の利いたプランだからというばかりでなく、「自分の花癡に近い性情のためであつたらう」とも言っておられる。

さて、コスモスであるが、「(長谷川)時雨女史が雁来紅を挙げたと聞いて、自分は先づ心ひそかにコスモスをと思い、次いで曼珠沙華を逸したくないと考えた。コスモスの方は支持者が多からうから、これは必ず何人かが選ぶだらうと安心していたのを、果して入れているのが菊池(寛)氏であったのも成程時代の好尚を知るに敏なる哉の感があって頷ける」と、コスモスへの関心が早くも示されている。コスモスについての詳しい記述が見えるのは、ずっと後の方であるが、これはその要約を紹介するよりも、少々長くなるが、先生の文章の呼吸をそのまま受け取ってもらう方がよからう。

▲コスモスや雁来紅さては向日葵などは由来、軽羅細腰と同じく背の高いのでないとつまらない。コスモスの我等が丈よりも高いのが杜のように簇ったのが嵐に吹き倒されたのが、素直に折れたあたりにもまた新しく根を生じて弓なりに起き直って花を多く咲き誇っているのなどは一段とあはれの深いものである。秋桜子とふさはしい文字まで与へられて、今日では異国の花とも見えず辺鄙の農家の垣根にもありふれるほどに早くも風土に化して、そのしをらしいぢらしいとこ

ろが生れながら大和島根の花らしいのが寧ろ不可思議なばかりである。それが新七草には女人によって選ばれないで男子によって選ばれたのも、当然といえば当然面白いと思えば面白い現象。選んだのが最も大衆の好みを心得た作家であるのも面白い。▽

単に花好きという以上に、佐藤先生の文人としての御性格の加実にうかがえるのが嬉しい。新七草そのものについても、「それが世界的な趣味を示しながらも根柢的にはやはり日本的なものになったのは当然の事ながら大に我意を得たところである」と言っておられるのが、そのままコスモスに対して示された御関心と一致するところも有り難い。

新七草の選定に、全面的に賛意を表された先生が、従来の新七草の中では第一等に推したいと思う尾花が外されているために、「世界的日本の意識を力説するらしい新七草にこの枯淡閑寂を排斥したのは当然とは思いつながらも」、本当の秋のもののような気がしない、とも言われる。それについて、思い出すことがある。保田興重郎氏が、向井去来の「君が手もまじるなるべし花すすき」を紹介した文章のつづきに、「この『君が手も』の一句は、私が殊に愛誦するもので、泪のこぼれるまでに切ないものを感じた。この世にある親しみの情が、永劫のかなしみがそくそくと感じられる」とし、つづいて、佐藤先生が晩年に或る所でされた講話の中に、折から野山一面に薄のなびく季節で、日本のすすき野の美しさについて語られ、こういう美の感じ方は、日本人に独特のもので、日本の文学も芸術も、その本質をその点から理解することが出来る、と言われた、

とも書いている。佐藤春夫——保田與重郎と受け継がれる、わが国文人の正統が、加実にうかがえる貴重な言葉として、忘れることが出来ない。

(昭和五九・一〇)